

生身

朝吹真理子

先日、八人くらいの友達と、久しぶりに会った。春から会うのをずっと控えていたけれど、このままだともしかしたら一年以上以上会えないかもしれないから、消毒と換気をして、少しよそよそしい距離で会うことに決めた。場所は、誰かの家だと負担が大きいかもしれないので、レンタルスペースを予約した。入ってみると、ソファやキッチン用品もある広い部屋で、お風呂まであって、誰かの実家に来たような気がする。

友達とは、オンラインでも何度か喋っていたけれど、画面の前に互いに座っていると、無言になる、ということが難しい。親しさ関係なく、なにか話さねばならない空気になってしまう。話している内容の面白さも、対面のときより、難易度が上がっている気がする。オンラインだと、複数人で同時に話すことはできず、ひとりずつの話を順繰りに聞くことになる。それも楽しいけれど、二時間くらい画面の前にいると疲れてしまう。ふだんのように、空間を共有していたら、五時間くらい、みんなで喋り通してもぐったりしないのに、ふしぎだ。用事ならばオンラインでもなんとかなるけれど、やっぱり、お喋りは、対面がいい。

会うなら少しでも体にも心にも負担がないように、二方向換気をして、マスクをして、なんならフェイスシールドもしようと、

友達が薬局で買ってきてくれた。チャイムが鳴って友達が入ってくる。ちいさく手を振り合い、最初は必要以上に小声になってしまう。全員、はじめてフェイスシールドをかぶるので、埃除けの薄いシートが貼られているのに気づかないで、けっこう曇ってるんだね、と言いながら、半透明の膜ごしに相手を見合った。

最初はマスクをずっとつけていることに違和感があったけれど、数ヶ月経って、慣れてきた。慣れてくると、人の顔全体をあまり見なくなるので、水を飲むときに友人の唇がちよつと見えたとしたら、またマスクで隠れてしまうのが、とても色っぽく感じた。感染症流行は憂鬱だけれど、コンビニやスーパーで、飛沫を遮蔽するビニールシートが下がっているのを見ると、蛍光灯がシートに反射してぴかぴか光っているのが美しく、見惚れてもいる。へんてこな生活のなかで、新しいよろこびをちよつとだけ見つけている。

実際に会ったところで交わす内容は他愛無くて、頬のところのマスクの線消えないよね、と言いながら、ポテトチップスやドライフルーツを食べた。無言でも気詰まりにならず、複数人同士で同時に喋ってもこんがらがらない。長時間マスクをつけて喋っていたから顔が痒くなったけれど、生身ってなんていいのだ。



Hisako MASUDA

朝吹 真理子(あさぶき まりこ)

東京都生まれ。作家。『流跡』で第20回Bunkamura文学賞受賞、『きことわ』で第144回芥川龍之介賞受賞。著書に『TIMELESS』『抽斗のなかの海』などがある。

増田 妃早子(ますだ ひさこ)

大阪府生まれ。画家。1985年京都市立芸術大学美術学部美術科卒業。個展、グループ展で作品を発表。